

Title	法王レオと宗教改革
Sub Title	
Author	木村, 重治
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.6 (1909. 7) ,p.25- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090701-0025">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090701-0025</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 法王レオと宗教改革

木村重治

宗教改革の必要は歐洲到る處に深く感せられ、法王制度の腐敗と法王權の濫用は識者をして殆んど忍ぶ能はざらしめたり。法王の擅横及び亂倫は其極に達し、修道院は無學迷信の巢窟となり、懶惰放蕩の中心となり、輕侮嘲罵の的標となれり。其當時の學者、説教者、諷刺家の著述を見るに、祭司僧侶の無學、野卑及不道德を暴露叱責せざるもの稀なり。忠實なる羅馬加特力教の學者と雖ども、今日十六世紀に於ける教會の規律の弛廢を痛嘆し、精神的改革の必要ありしこと承認すること躊躇せざるなり。宗教會議は教會の分裂を彌縫せんが爲めに、教會の改革を計らんが爲めに、異端を根絶せんが爲めに召集されたと失敗に終りぬ。佛蘭西英吉利は稍や満足したるが如きも、獨逸は甚だしく失望したり。法王マルチン第五世及ユージニウス第四世は宗教會議に敵抗して勝利を得たるを喜び、其威信の失

26 墜によりて深刻の損傷を蒙り法王制度の政權の漸く衰頽せるを全く知らざるが如し。中古に於ける法王制度の兩翼たる煩瑣學派と修道院主義との勢力は漸く傾倒せんとせり。實に器既に瑕瑾を生したりされどルーテル之を天下に示すに至るまで之れに氣付かざりしのみ。抑もレオ第十世の法王職に登臺せるときに教會を見るに第十四世紀の法王職分裂の時代特に又た第十世紀及第十一世紀の時代に於ける狀況に比して必ずしも勝りて險惡なるものと云ふ可からず却て教會の規律稍や伸張して争鬪も當時の法王の覽明なる政策と慎重の智略とによりて分裂を癒することを得たり。法王レオ第十世に其先代の諸法王の如く法王職の價値を損害するに至れる甚だしき缺點無く且つジュリアス第二世の如き過激にして險惡なる性質を有せざれど偉高にして健全なる意見に乏しく操行もまた修まらざるものありたり。彼は政治家として外交家として稍や稱す可きものありと雖も時代の精神を洞察し、思潮の進行する方向を認むるの卓見なかりき。當時國家的競争及各國君王と野心は到る處に歴然たり。此の危機に際して法王制度は國家主義の勃興せる雄偉の精神と對峙する力なきが如く見えたり。腐敗と

忿亂は教會の心核を腐蝕しつゝあるなり而して國家主義の精神と文藝の復興と發明發見の曙光は漸く法王權を傾倒しつゝあるなり。法王權は今や實に薄氷の上に立てり。

ローレンツオデメデイチはジューリアン、ピーター、及ジョーンの三子を有せり、而してジョーンは即ち法王レオ第十世なり。千四百七十五年フロレンスに生る。彼九歳にして既に僧正となり、十三歳にしてカーデイナルとなり、三十七歳にして法王となれり。千五百十三年法王ジューリアス第二世入滅してジョーンは詮衡によりて法王に擧げられレオ第十世と稱せり。新に法王職に登りたるレオは選舉の衝に當りたる僧侶には最も適任者と認めらる可き性格を具有せり。彼は人と爲り溫良寛容にして快樂を好めどもポールジア家の淫佚に陥らず政治家として敏腕を有し而もジューリアス第二世の猛烈なる野心なかりしが如し。レオ第十世は學藝文學を愛したれど道德、禮貌、正義の觀念に乏しかりしなり。サルピーはレオの學問、趣味及直白の諸點を稱譽して且つ曰く、若しレオが此等に加ふるに宗教上の智識と敬神の念とを具有したらんには實に完全圓滿なる法王たる可かり

28  
しなりされど不幸にして此の二徳を缺きたるは實に歎ず可きなりとパラウキチ  
ニ―は法王レオは希臘の偶話に精通し又詩人の觀樂に耽るものを身邊に集めて  
教會の歴史及び師父の教説を熟知せるものに接することを爲さざるを嘆ヒレオ  
は世俗の學藝に熱心にして狩獵を好み戯言を弄し華飾を愛し彼の聖職に適せざ  
る者に心を傾くるを叱責せり。パラウキチニ―は法王にして俗輩を遠けて神學  
者と親しく交りたらんには彼は赦罪券を播布するに更に慎重の態度を取りル  
テルの異端も學者の論駁によりて恐らくは迅速に鎮壓し得たるならんと思惟せ  
り、教會の管長たる法王レオは宗教及精神的事柄よりも却て文學美術及音樂に更  
に深き趣味を有したり。基督教徒より徵集せる巨額の財寶は其親戚縁者の間に  
分與せられ華奢莊觀偉麗に對する嗜好を満足するがために法王の金庫を傾け盡  
せり而して之を填充するの新方法として法王ジョーン第二十二世が嘗て犯罪者  
に課したる舊税を再興せり。彼は記録所の塵芥中に埋没されたる舊税法を訂正  
して之を歐羅巴全洲に布達し基督教徒に強盜、姦淫、親屬相姦、雞姦、暗殺、親殺等の諸  
罪の赦免を買償し得ることを告げたり。次にレオは土耳其人に對する十字軍を

起さんことを宣告し以て十一税を徵收せんとせりされど此は全く失敗に終れり  
西班牙に遣されたる法王の使節は西國の攝政たりしカーディナルキシメネー  
の爲めに排拒せられ他の諸國に派遣されたる代表者も功を奏せずして追拂はれ  
たり。

レオ第十世は遂に此の如き集金法の効力少きを認めて新に良策を講ざる可から  
ざるを發見せり。千五百〇六年ジュリアス二世の治下に壯麗偉大なる規模  
を以て着手せる聖彼得大聖堂の再建の事業はレオをして赦罪券を賣りてキリス  
ト教諸國の補助を歎願するの機會を得せしめたり。余此に赦罪券の由來を述ぶる  
の違あらず唯だ赦罪金を以て一時教會の歳入を補助することは是れ決してレオ  
の創意に出でたるものに非ざることを明かにせんと欲するのみ。赦罪の種類は  
一ならず。素とこれ教會の法規に則れる懲罰を赦免することのみ定められた  
るものなるが遂に地獄の苦業、罪、其他キリストの代表者の放釋する力あるもの、  
赦免として賣廣めらるゝに至れり。されば其後此の如き法王の赦罪權は屢々問  
題となりて攻撃の中心となり、地獄の苦業を金錢にて賣買するの思想は無智にし

30 て迷信深き愚夫愚婦の信ずる處なりしもルーテル以前に既に熱誠の人士は之に對して非難攻撃の聲を擧げたり。則ち英吉利のウヰクリフボヘミアのハッス、獨逸のヨーハンフオンウエセル、瑞西のトーマスウヰテンバッハ等是なり。されど遂に其効を奏せざりしなり。レオは彼の公認されたる職權内に於て事を企てたりしも赦罪券の賣廣めによりて生ず可き弊害と濫用に失するものたるを豫期せざりしを以て之が防禦の策を究めざりしなり。法王は亦た此の赦罪券分布の重要にして慎重の處置を要する使命を操行の清廉ならざる者に一任せるは實に彼が終生の誤りと云はざる可からず。此重任に當りたるものはテツツェルと稱するものにして彼はドミニック派の僧侶にして哲學博士なり。彼は華麗壯大を裝ふて獨逸に來り堂々たる態度と滔々たる雄辯を振ふて聖彼得大聖堂建築費を募集せん爲めに法王の發布せる赦罪券の効能を説けり。サキソン領内に於ては赦罪券の賣買は禁じられたり然るにテツツェルは其國境附近の地方たるユツテルバッツハ、ツェルプスト、ウヰツテンベルヒ等に於て説教を爲し未曾有の誇言を吐露し嫌厭す可き方法を取りて之を賣り初めたり。而して事態忍ぶ可からざるもの

あるに至れり。幾多の人士は危険の迫まれるを怖れたれど之を口に出さざりしなり。されどルーテルは之が爲めに好悪なる結果の來る可きを恐れ、輕々に看過すべからざるを憂ひたり。ルーテルは赦罪券の正當にして有用なることを疑ひしに非ず、されど妄りに之を流布して、宗教の尊嚴を損害するが如き傾向あるを見て之を攻撃し始めたり。而して千五百十七年十月三十一日赦罪券販賣を攻撃せる九十五ヶ條の論題をウヰツテンベルヒ教會の門扉に掲げたり、而して又其論題を近隣の監督に通牒して其毒害の蔓延を防がんことを嘆願せり。これ彼は教會の政治實情に通せざりしが故に其害惡を曝露し、其不法なるを撃破せば直ちに其販賣を防遏し得るものなりと思惟せるが故なり。其論題は直ちに天下の耳目を聳動し、而して特にドミニック派の僧侶を激昂せしめたり。テツツェルは直ちに駁論を提出してルーテルを攻撃せり、而して其駁論提起の故を以て博士の學位を得たり。シルヴェスター、プリエリス及ドクトルジョーンエツク等また均しく過激なる言辭を以てルーテルの説を難したり。

31 ルーテルは腐敗の根源は神の眞理と人間の意見とを混同するにあることを見て

遂に聖書のみ、獨り能く信仰の確固たる基礎たるに足るものにして、教會の教説及状態の眞偽曲直は聖書によりてのみ判断す可きものなりとの主義を發表せり。ドミニック派の僧侶は彼をローマ法王廟に誣訴せり。レオ第十世は之れ僧侶一派の抗争なりとして、深く意に介せず、之を一笑に付し去らんとして、ルーテルを慧敏なる論者なりと呼べり。彼は嘗て以前にサヴオナローラの剛腹なる論争を見たり、而して此の雄辯熱烈なる僧侶を容易に壓迫せることは、レオ第十世としてルーテルの論争を輕視するに至らしめたり。加之、當時の教會は大なる信用と、深き尊敬を博し居れり。且つ法王の人格もまた比較的高潔にして全歐洲と風靡せり。彼は自己の周圍に聖賢を集め、天下の畏敬する處となり。キリスト教國の君主は辭を卑ふし禮を厚ふして法王の意を迎へ、ローマ教會に親を求めたり。ルーテルも法王に深厚の誠意を表し、法王に書を奏して曰く、余は余が全心全力を捧げて、臺下に至す、余を生かし余を殺し余を賞し余を罰するは一にこれ臺下の聖旨にあり、臺下が統卒の聲及宣言の聲は我之をキリストの聲なりと認む、余はまた臺下の手に死するを得は幸なりと。斯の如き情況の下にありて、神の明と、豫言者の力なくん

ば、誰れか如何でよく獨逸の一隅にある一介の貧僧の努力が、斯の如き深遠の震動を世界に惹起することを豫知し得んや。されど年を経へざるにルーテルの著書が獨逸に及ぼせる勢力の大なるに驚きて、法王は遂に此の事件を更に重大視するに至れり。ルーテルの意見は幾多の穩健なる人士及學者間に容れられ幾多の高貴の縉紳がルーテルの主義に賛成を表するに至れり。サキソニーの明君フレデリックはルーテルの意見に賛成して、彼の反對の攻撃に對して、彼と保護することに力を盡せり。千五百十八年八月十七日法王はルーテルに六十日以内にローマに來りて彼の教説に關する駁論に答ふ可き命令を發したり。改革者は獨逸に於て更に安全なる裁判を受けんことを願へり。於是レオはカーデナルゲータを使はして彼の辨明を聞かしめたり。ルーテルはアウグスブルグに至り、法王の使節の一人と第一の面白き會見を爲せり。ルーテルは感慨胸に溢れ、意氣軒昂たるものありたり。彼は自己の名譽と自由を保護し、自己の大學の名譽を維持し、獨逸神學の將來の基礎を植て、外國の干渉を脱却せんとする國家の冀望を双肩に荷ふて立たざる可からざるを自覺せり。彼は幾多の疑懼を以て往けり、素より彼は未だ明確なる思想

34  
を形成するに至らざりしと雖ども、彼は誠意全力を傾注して其最上を盡さんとの決心を以て往けり。彼其友スパラチンに書を送り云はく、余は決して異端者たらざる可し。余或は議論に於て誤に陥ることあらん、されど何事をも斷言せざる可し而も余は人々の意見の奴隸たることを欲せざるなり」と。ルーテルを裁判するの重任は獨逸に使されたり使節カーデナルトマソタテウキオ即ち通稱カジエタンなるものに委託されたり。彼は深奥なる學識と高遠なる名聲とを有する人にして神學上の論難の任に當り其學殖の富贍該博なるを以て能く論敵を威壓するに當時殆んど彼の右に出づるものなかりしなり。赦罪券の問題に關してはカジエタンは多くの點に於てルーテルと同意見を懷き、赦罪券販賣者の態度を非難したり。彼は赦罪券なるものは正當の理由により許與されたる場合に於て始めて有効なるものにして之を受けたるものに誠實改悔の心を生ぜされば何等の効を奏するものに非ず、且赦罪を受けたる後と雖ども、靈魂上の醫藥として常に悔悟の精神なかるへからざるとを説けり。ルーテルは其第一の會見に於て親切丁寧なる歡待を受けたるのみならず、大なる尊敬を以て迎へられたり。カーデナルは注意

35  
して討論に亘るが如き態度を避け、單にルーテルの誤れる論題を撤回して、將來此の如き説を爲すことなく其他教會の職權に抵觸し又た反抗するが如き議論を謹む可きことを告げたるのみ。ルーテルは之れを答へて決して誤れる論説を流布するものにあらざるを辨じ、其誤謬の點と見ゆるものを指摘せられんことを請へり。ルーテルの立論は基督教の信仰の根本的教説に關する處に非ずして、彼の議論は當時一般に認められたる難局に觸れたるものなるが故に、法王廟の處置に關する實際問題に抵觸することなくして、抽象的の意見を吐露するに止まるものたること能はざるものなり。抑も數世記に亘りて法王の獨裁權の上に築かれたる一種の組織を評論するは極めて危険なるものにして之を説明することすら安全なるものにて非ざりしなり。何人と雖ども法王の署名せる文書又は法王廟より發布せられたる教令の上に顯はれたる平易なる意義を論評するを許されず。若し一度之を許せば之より惹起す可き困難を處理するに非常の困難を生ず可ければなり。獨逸は法王廟に有害なる議論を以て不穩の傾向を示せり、故に今や之を停止せざる可からず。カジエタンの目的は討論詰難に非ずして沈黙せしむるにあ

36 而して彼は議論を爲さずして其意見を撤回せしめ、教會の判決に服従せしめんとせり。於是、ルーテルは自己の立脚地の優秀なるを感じ、斷乎として意見の撤回を拒絶せり、而して慎重に自己の決意を明かにして、靜かにアラグスブルグを去れり。法王レオも等しく慎重の態度を取りて、而も頑として一步を譲らず、彼の地位や實に困難なるものにして、進退維に谷れる状なり。法王は千五百十八年十一月敕令を發して、赦罪の説は正當なるものなることを宣言し、頑固なる僧侶のことに關して一言之に説き及びたることなし。されどルーテルは此敕令を評して大膽にも法王も他の人と等しく誤に陥ることある可きを以て法王の言は必ずしも最後の判斷に非して、更らに宗教會議に判決を待つ可きを論せり。宗教會議を口にするのみにても法王廟には之れ宣戰に似たるものにてありたるなり。されば此時恰も重大なる事件政界に顯はれ、歐洲の注意は暫く宗教の論争より政治上の討論に轉じたり。當時の重要問題は、皇帝たるものは何人たりやと云ふにあり。そは皇帝マキシミアンの歿は千五百十九年一月に公表されたばなり。西班牙の王にしてフランダーの主たるチャールスは祖父の後を繼いで帝位に登

らんことを希ひ、同時にネーブルスを領せん爲めに、法王の許諾を求めたり。されど此時レオの意向は佛蘭西に傾けり。彼が巴里に遣はしたるカーディナルビビエナは、嘲罵頓才に長じ爲めにフランスの歡心を得、遂にローレンツオデメデイチと佛國の皇女との結婚を調停せり。而て此結婚は兩國の同盟をして更に強固なるものとならしめ、於是、レオはチャールスの請求に耳を傾けざりしが如し。されど千五百十九年チャールスとフランスが共に公然と帝冠を要求せるときに際して法王は兩者に敵意を表したりしが、彼は遂にチャールスの選舉を防遏する能はざりしなり。而してチャールスの優勢は、佛國の爲め、羅馬の爲めに等しく強大なる打撃にてありたるなり。千五百十九年六月二十八日十九歳の青年たりしチャールスは羅馬人の王、即ち新選皇帝の宣言を受けたり。

37 此の皇帝選舉の結果によりて蒙りたる秘密の而も酷烈なる失望は彼の深き憂慮を増さしめたる家庭の不幸と接踵して至れり。壯麗と稱せられたるローレンツオの末裔なる彼の甥ローレンツオは千五百十九年四月二十八日に薨去し、自己の家族の勢力を扶殖せん爲めに百般の計畫を廻らしたる教主は、此の如き野心の頼



むに足らざるを深く悟りたるや明かなり、ネーブルスの王位に登る可かりし彼の弟ジュリアンは倒れ。法王の苦心によりて漸くウルビノ公國を繼ぐに至りし彼の甥は空しく戦場の露と消え、而して自から歐洲の勢力均衡を維持せんとせる彼の企圖は、チャールス第五世の選挙によりて遂に畫餅に歸したり、故に政治上の活動の不如意と野心の失敗はレオに強き打撃となり、彼は溫和寛柔になり只管遊戯、歡樂、美術に思を寄せて千五百二十年の一年間は殆んど歐洲の政事に干渉したることなしと傳へらる。

ルーテルの名聲日に昂がり、改革の主義益々進歩するに至りて、法王は遂に教會の事に其注意を拂はざる可からざるに至れり。彼は調停及寛容の態度を以て事を處せんと欲したれば、教會の正統主義の硬派の人士は、法王の優柔なる手段に嫌厭たる思ひありたるや明かなり。法王がルーテルと會見せしめんが爲めに遣はしたるものはサキソニーの貴人チャールスミルティツなり。彼は其使者をしてサキソニーの選帝侯に特別の敬意を表する爲めに、聖別せる薇薔花を送れり、而してルーテルは法王の阿諛媚態の及ぼすべき結果を恐れたり。ミルティツは舊知己

と熟談の後、法王の親書を奉呈する以前に、一個人の資格を以てフレデリックに謁見せんことに意を決し、自から仲保者の地位に立ちて、ルーテルと法王との間を圓滑に調停せん爲めに、大に工夫を廻らせり。千五百十九年一月初旬、アルテンブルヒに於てスパラテインの面前にて彼はルーテルと會見せり。ルーテルの最も意に介したる處は、これ以上、選帝侯を煩はさざらんにてありたり、故にミルティツの主張に充分の譲歩を爲さんことを希ひたり、ミルティツは濃厚の態度を以てルーテルに接し、議論を爲し命令を與ふるべきことを爲さず、唯だ何處までルーテルは譲歩し得るやを確めんとせるのみ。彼はルーテルを敬服せしめて遂に熱誠なる改革者をして、法王に謝罪狀を認め、世人にローマ法王の命令を奉ずべきの勸告を發し、最早赦罪券の問題に關して人心を攪亂するが如きことなかるべきを約するまでに至らしめたり。若し此の和解と、此の沈黙とを維持し得たらんには、是れ最良の企畫にして且つ教會の分裂を防ぐに足る可き唯一の良策にてありたるなり、されど火の手は既に歐洲全土に移りたれば、ミルティツとルーテルとの間の契約は唯だ短時期のみ能く之を持續し得たるのみ。改革の精神は教會政治家の外

40 交術によりて鎮壓し得べからざる迄に、人心の奥底に浸潤せり。ルーテルは最早や自己の主にあらずして、更らに高大なる勢力の一機關に過ぎざるなり。抑も人之を提唱し、神之を處理し給ふものなればなり。

エック博士は再び火焰を攪き起せり。彼はルーテルの友たりしカールスタートと争論を始め、遂にルーテルを再び其渦中に陥らしめたり。此論争に於て、カールスタートはエックに反抗して自由意志に關するアウガスチンの説を主張せり。ルーテルが此の論争に惹き入れられたるは、法王の主裁權に關する問題に於てなり。辯論に於てはエックは確かに勝を制したるが如し、ルーテルは其議論に満足する能はず、辯論は徒らに、時間を浪費するに止まりて、實効なきものと思へり。されどルーテルの説は大に當時の青年の意に投じられたれば、數多の學生はライプツヒを捨て、ウヰデンベルヒに集れり。畢竟するにルーテルは辯論の利を占め、輿論はルーテルに加擔したればなり。抑も此の神學上の論争は、ルーテルの法王組織より脱却するに至らしめたる端緒なりと云ふ可し。ルーテルは此論争に關する準備を爲すの必要上、遂にローマ教會の誤謬及び腐敗の根本を充分に研究して、漸

く自からローマ教會より分離する必要を見るに至れり。此に至りて彼は初めて法王の神權と宗教會議の不可誤を否定するに至れり。彼は神の兵士として、教會を腐敗せしめたる惡鬼の魔力と虚偽とに對して戰闘せざる可からざるものなりと自覺せり。

ルーテルとメランヒトンの親交今や漸く厚きを加え、メランヒトンはルーテルの最も有益なる味方となり、最も有力なる共勞者とはなれり。メランヒトンは靜謐にして學術の素養は深く、ルーテルは多くの困難と、激烈なる道德上の衝突とを経験したり。ルーテルはメランヒトンよりも身心共に頑強にして、メランヒトンはルーテルより學問深く、胸襟寬廣なりき。ルーテルは戰爭の人にして、メランヒトンは平和の人なり、ルーテルは創建的天才を有する新天地の開拓者なり、而してメランヒトンは精勵不倦の該博なる學者なる。ルーテルは最も大膽なる英雄的改革者なり、而してメランヒトンは最も濫良にして敬虔なる改革者なり。ウヰツテンバルヒの兩改革者は互に欠たるを全ふし、足らざるを補はんが爲めに、攝理の手によりて、相接近するに至れるものにして、神は彼等の才能と精力とを合せて、獨逸宗

42  
教改革に努力する處あらしめたるなりと云ふ可し。兩者若し其一を欠けば、其改革たる極めて異なる結果を齎らしたるなるべし。ルーテルの努力によりて宗教改革の精神は億兆庶民の心に達し、メランヒトンの智力によりて獨逸に於ける學者の同情を得たり。ルーテルは彼の新思想はメランヒトンの靜思熟慮による獨立の研究の結果同一の結論に達したることによりて益々確信を深ふすることを得たり。ルーテルは又フツトン及シツキング等の愛國的熱情によりて鼓舞され、法王權をサタンの本據として之を攻撃するの勇氣を得たり。千五百二十年の七月より九月に至るの間に彼は最も有力なる改革主義を闡明せる著作を公けにせり。「獨逸貴族諸公に訴ふ」教會の巴比倫俘囚「キリスト教徒の自由等是なり。ローマ教會の神學者は益々激昂して、レオは遂に千五百二十年教令を發してルーテルの著書は異端にして、其説を信じ、又之を傳ふるものは盡く之を破門に處す可きことを宣言せざるを得ざるに至れり。法王はルーテルを寛容と親切とを以て聖書に記せる放蕩息子の如く見做し、彼に悔悟以て、教令發布後六十日以内に彼の誤説を撤回せんことを熱望せり。されど改悛の狀顯はれざるを以て、直ちに呪逐せら

れたり。法王は獨逸の諸公に彼を保護し、助力することを嚴禁し、之を犯すものは破門に處し、人類の敵と見做さるべしと云へり。教令の發布と厲行とは之を二人の伊太利の僧官アレキサンダーカテオリ及エツク博士に任せられたり。北部獨逸に於て名聲を失墜せるエツクを其任に與からしめたるは法王の爲めに不幸となりて、却て改革に人心を向はしむるに至れり。ヤンセンは之に關して左の如く曰へり。

Es war ein trauriger Missgriff dass mit der Verkündigung und Vollstreckung der Bulle in mehreren deutschen Diöcesen Luther's Gegner Johann Eck beauftragt wurde."

43  
教令は獨逸に於ては殆んど一般に反對の態度を以て迎へられ、或る地方特にライプチヒに於ては公然の反抗を蒙れり。エルフルトに於ては、神學教授は教令を發布することを禁じ、學生は其印刷せる令書を水に投じ、「Bulla est, in aqua natet」と絶叫せり。ミルテイツは教令の發布を聞き、大に慨嘆せり、何となれば、これ彼が溫和の處置を全く打破するものなればなり。されど彼は尙其癖害を少なくせんが爲めに千五百二十年十月十一日リヒテンベルヒに於て調停を試み、遂にルーテルをし

44 法王に痛激の眞理を含める親書を送るに至れり。されど教令の發布止まざれば、ルーテルは之をキリストに反抗する悪魔の事業なりと絶叫せり。且彼は此の憎むべき咀ふ可き教令と法王權を規定せる法典と共にウヰテンベルヒに於て公衆の面前に之を燒捨てたり。茲に於て兩者の正邪曲直を決し得るものは王權あるのみ、故に法王及ルーテル共に皇帝の味方を切望せり、即ち一は皇帝が確實嚴格なる正統の信者たることを證し、一は皇帝が寛厚にして公平なる判官たらんことを示さんことを希望せり。ルーテルは遂にウオルムスの議會に立つ可き召喚を蒙り、其敵に誘はれ、味方に勵まされて之れに應じたり。議會の前に立つに至りて彼の頑強なる精神と斷乎たる意志とは益々堅固なるものとなり。皇帝及議會は共に彼を有罪なりと裁決したり、されど彼は安全に歸郷す可き許可を與へられりしが、サキソニーの選帝侯の命令によりて備へられたる一隊の騎士によりて改革者は一時隱閉安全の場所に奪ひ去られたり。吾人茲に至りて獨逸が宗教改革の産所として選ばれたるは實に幸福なることにありたりと云はざる可からず。絶對君主の領土、假令ば西班牙及佛蘭西に於て勿

論英吉利に於ても改革の運動は直ちに壓倒されたるなるべし。以上の諸國の君王は其確信に於て新思想に同情を有せりとするも政策上法王の歡心を得んが爲めに正統派の舊敎主義を奉ずるの已むを得ざるものありたり。されどサキソニーのフレデリックは歐洲政策に關して其勢力大ならざりしが爲めに、敢て法王の援助に信賴するの要なかりしなり、又彼は小君主にして敢て野心を挾まず、其大學に、其敎授に、又其人民の幸福安寧に趣味を有し注意を拂ひたり。彼はサキソニーに於ては其隣國に於けるよりも、自由の意志の發達せるを誇りとなせり。而してルーテルは此の地にありて人間の傳説よりも神の權威を尊重し政府の壓制に反抗して、良心の自由を守るべきことを恐れなく大膽に主張せり。ウオルムスに於て勇敢なる論辯を爲し、議場を壓したる後、ルーテルは暫く世界の舞臺より隠れたり。彼は法律保護以外に置かれ、法王は彼に對して非常の手段を施すに躊躇せざりしなり。故に外面、法王黨は議會に於て勝利を占め、同時に一方、法王及皇帝の聯合軍は、伊太利に於て優勢を占めたり、レオの近親の一人カーデイナルキウリオデメ

デイチは戰場にありて勝利の軍勢と共にミランに入れり。パルマ及プラセンチ

46

アは回復せられ、佛軍は撃退せられ、法王はミランの新王の上に大なる勢力を振ふを得るが如き形勢にして、今や實に、政界に新局面開展し、宗教界に大運動を開始されたる歐洲に於ける最も重大なる危機にてあるなり。事局將に法王レオをして前者を指揮し後者を威壓し得るの權勢を有するが如き情況を呈したり。彼は尙春秋に富み此の危機を利用して望を將來に置いて、他日の成功を期す可きものありたるが如し。彼の企畫の成功の報道彼の耳に達したるときは彼はマリアナの別荘にありたるが高僧會を開きて彼の勝利の好果を收むるに必要な處置方針を定めんが爲めに、直ちにローマに歸れり。されど法王は輕症なる風邪に冒されたるの故を以て、高僧會は延期されたるが法王の病狀俄然變じて重態となり、遂に千五百二十一年十二月一日入滅せり。

レオは政治家として非凡の性格と精力を有したり、されど彼も亦た萬人の有する弱點を免れ能はざりしなり。權利の均衡を維持することは、彼の理想にしてまた彼の精神にてありたることは疑ふ可からざる處なれど、些細なる一個人の野心之れが妨げを爲したること如何に屢々なるぞや。彼が歐洲政策に關する干涉は、其

47

第一の場合即ちジュリアスの締結せる條約の履行を主張せるときの外、總て常に不正直にして、且つ不信實なり、而して成功せること殆んど稀なり。彼の教會の管長なる資格に於て、キリスト教會の元首としてレオ第十世は苛酷にして放肆なりとの批評を受けたり。彼の赦罪券の効力を誇張せる如きは、明かに不謹慎なるのみならず、犯罪なり。彼のルーテルに對する行爲は、非常に批難されたり、されど彼れが後に至りてルーテルに對してなせる處置は、溫良、平和、巧妙なるものと云ふ可し。濫用と腐敗によりて汚れたる空氣中にありたる彼に、合理にして公平なることは望む可からざる所なり。彼の爲せる以上の事は、彼に於て求む可からざるべし。時勢の向ふ處彼如何とも爲す能はざりしなり。爆發物は既に置かれ、火花は飛んで其の上に點せられたり、爆發は到底免る可からざりしなり。國家思想は漸く形に顯はれ、宗教上の自由は、既に萬民の心情に浸潤し。歴史の向ふ所、何物も能く之を防止し得るものなし。議會の決議は國民の決議には非らず、ルーテルは教會と國家とより捨てられ、法王と皇帝と大學とより排斥せられ、人間の社會より追はれたれど、彼の勢力は着々世界の四隅に瀰蔓せり。ルーテルは攝理と將來

48  
 とを己の味方とせり。レオの將に永逝せんとする頃には、彼は外面上の成功を得たり。彼の方策にして實行せんと勤めたる目的は、最も幸福なる結果を來さんとせり。而も彼の生命の長からざりしは、彼の一身に取りて幸甚なりしと云ふ可し。彼の死後事局一變せり、而して彼は滔々として進み來る法王權に不利なる勢力に抵抗して能く之を防止し得たりと信ずるは極めて困難なり。其勢力の實に強大なるは彼に繼で法位に登りたる法王の悲しくも認めたる處なり。歐洲の政治上の發達は、舊制度に對する人民の態度を一變し、智識上の發達は舊思想に對する態度を一變せり。レオ第十世は野心に驅られて、自由を屈し良心を破壊せんとして償ふ可からざるの失敗を爲せり。ルーテルが教會の腐敗を叱責して其主張を撤回せざりしは實に其宜しきを得たるものなり。彼は豫言者の力を以て攝理の意思を語り、神の言語と良心の自由の優れるものなることを立證せるものなり。而して傳説と權威とは全く粉碎されたり而して歴史の進歩の道は開かれたりと云ふ可きなり。

### シヨン、ラスキンの立脚地より見たる俳句

忽滑谷快天

49  
 眞正の藝術とは如何なるものかといふに就て、ラスキンは『ヴェニス』に大要左の如く説いてゐる。先づ學問と藝術とは二様の差違點があつて、學問は知る者、藝術は製作する者、學問は事物をありのままに扱ふ者、藝術は事物が心靈に感ずるやうに扱ふ者である。學問上より見れば太陽は地球より九千五百萬哩の距離にあつて、地球の百十一倍の大きさを有し、二十五日十四時四分間に其軸に於て自轉する。されど藝術上より見れば右様のことを知る必要はない、藝術は但に太陽を神化して光明赫灼たる靈神としてもよし、或は之を擬人して眉目秀麗なる男子が白馬金鞍に跨つた處としてもよい。藝術は事物の精神を洞觀する力あるもので、事物の外相に關する眞を發見するのみでなく、其中心たる本質に關する眞を發揮するものであるから、學問と比較すれば藝術の領域は一層廣漠である、并は心靈界は